

カンキツ新品種「はるみ」の安定生産技術を開発しました

- ▶ 研究期間：平成 14 年度～18 年度（県費研究）
- ▶ 研究所の研究成果
「はるみ」を毎年安定して生産する技術を開発
- ▶ 連携体制
 - 広島県果実農業協同組合連合会：技術の普及
 - 広島県東部農業技術指導所：技術の普及
 - 広島県西部農業技術指導所：技術の普及



図 1 「はるみ」の果実

成果の概要・活用状況

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所が育成した「はるみ」(図 1) は、食味が良好で、果皮が剥きやすい新しい品種です。しかし、果実の成る年と成らない年を交互に繰り返す性質(隔年結果性)があり、生産が安定していませんでした。今回開発した新栽培法では、樹に成らず果実の数量や水やりの管理指針を確立しており、毎年安定した収量を得られます(図 2)。

「はるみ」の栽培面積は、平成 13 年の 39ha(ヘクタール)から平成 21 年の 116ha まで拡大しました。販売金額も平成 13 年度は 0.5 億円でしたが、平成 21 年度は 3.5 億円に増加しました。

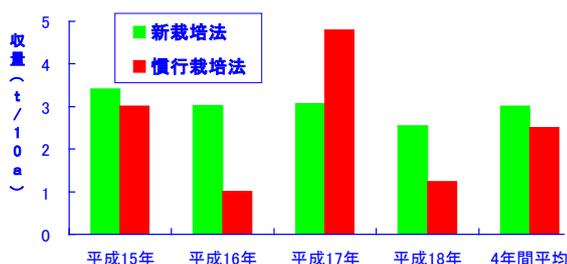


図 2 栽培法の違いと収量の年次推移

研究開発のポイント

葉で作られた光合成産物は、果実、枝・葉および根に分配されます。「はるみ」では、他のカンキツと比較して、光合成産物が果実に多く分配されるため、翌年に開花・結実するための樹体内に貯蔵される養分が不足します。

そこで、樹の上部 1/3 の果実は全て摘み取り、それより下部の果実を残す管理(図 3)を行うことによって、養分が枝、葉、根に貯蔵され、隔年結果を改善できます。

摘果時期は他のカンキツより早く、6月中旬と7月中旬の2回行います。

翌年に質の良い花を必要数確保するには、夏場、特に8月に土壌を乾燥させないことが大切です。本技術では、夏場の水やりの管理指針を確立しており、質の良い花を安定して確保できます。



図 3 樹冠上部全摘果

研究開発のきっかけ

「はるみ」は、平成 11 年に新品種として登録され、有望な品種として県内のカンキツ産地で導入が進みました。しかし、隔年結果性が強いことから導入のスピードは鈍化しました。そのため、隔年結果を防止して連年安定生産するための研究開発に取り組みました。